

戦時中の思想弾圧による悲劇

笹川 芳（昭和 13 年生まれ）

人間とも思えないほどやせ細った体を横たえている姉。台所で母は声も立てずに、はらはらと涙をこぼしている。小学校 1 年生であった私は家族に何が起こっていたのか知らなかった。

1 年 4 か月間の抑留生活を強いられていた姉が帰ってきた日であった。1940 年（昭和 15 年）女専を卒業し教職を志していた姉はこれからの人生、教育の規範をカトリックの教えに置こうと決心していた。ところがそのころの日本は戦争に突入する直前であり、国民の思想統一が厳しく、神父のもとで熱心に続けられた聖書研究会が、警察当局ににらまれることとなった。

1944 年（昭和 19 年）カトリック高田教会の神父と姉を含めて 7 人の信者が突然連行され、そのまま直江津・長岡・新潟の刑務所に転々と未決のまま 1 年 4 か月間抑留されたのだ。容疑は信仰告白とその主張が当時の国民感情に逆らう危険思想と判断されたからである。ドイツ人の神父は英国に留学されたことがあり、アメリカ人とも付き合いがあるというだけで、スパイ容疑であったという。いつ果てるとも分からない戦時中の獄中であって、尋問されれば答えなければならず、答えれば不当に捻じ曲げて調書に記される、劣悪な留置場内で差し入れの食料もまともに届かない等、20 歳そこその女性の 1 年 4 か月の時間を想像するだけでも惨いことであった。

父を早くに亡くした私たち母子家庭は「スパイ容疑者の家」、「直江津農商学校の火災は彼女の放火」（その時留置場にいた）などの風評にさらされ、「村八分」的な状況にあった。そしてなお終戦後もしばらくは周りの様々な仕打ちに耐えなければならなかった。

兄 2 人は出征（弟は特攻隊志願）していたし、長姉は関東軍司令部軍属の法政大学の教授夫人として満州に渡っていたし、伯父はブラジル総領事であったし、いわゆる「お国のため」と親族は命がけで頑張っているのだから、なんと矛盾した話ではないか。

姉は 1986 年カトリック高田教会の「創立 75 周年の記念誌」を制作する際に始めて重い口を開き、当時のことを語ってくれたのだった。

獄中生活で身も心もボロボロになった姉は入退院を繰り返しながらも、初心の教職に携わり、高田、秋田、名古屋で教鞭をとった。しかも最後には伯父（ブラジル総領事）から聞かされていたブラジルサンパウロ奥地の日本人入植地の人々の困難な事情を救済・支援のために活動した。そのまま力尽き、はるかサンパウロの 400 キロメートル奥地の土になってしまったのである。

現在、かの大国で見るとおり戦争はどんな大義名分を掲げようとも絶対にはじめてはならない。命令を下す者も前線で命をさらす人々をも狂気にしてしまう。そして、犠牲になるのはいつもただただ庶民である。どんなことがあっても日本が再び戦争にかかわることがあってはならないと強く思うのである。